





八雲龍守  
校訂  
一葉舎仙鳧

校 正  
七部集

椀屋 江嶋伊兵衛版

凡例

一世は御階の...  
芭蕉翁正風の...  
門人の誰か...  
御翁の...  
まへに書...  
て書字の誤...  
と抱く老...  
とさら...  
て悉く...  
一假字...  
言小...  
一詩題...  
あは...  
一校...  
抑...  
年...  
...

八雲龍守



乾の巻

春の日

初丁より六丁迄

春の日

七丁より十二丁迄

ひさこ

十三丁より十八丁迄

猿蓑

十九丁より廿三丁迄

續猿蓑

廿四丁より廿七丁迄

坤の巻

阿羅野

初丁より十八丁迄

炭俵

廿一丁より廿三丁迄

春の日

曙えんとんくの戸印あひい  
熱田のうらふゆふの湯  
〜ゆふはあつたの〜ゆふあつた  
ていけと〜あり重五うねりあつた  
竹藩を〜あつたゆふあつたあつたの  
ま〜あつたゆふあつたあつた

二月十八日

荷兮

後ちる中馬なり〜

連 重五

ゆのまひゆ〜

西桐

僅ち〜ゆのちふあ〜

李凡

ちちゆふ〜ゆ〜

昌圭

〜ゆ〜ゆのゆあ〜

執筆

〜ゆ〜ゆのゆあ〜

重五

〜ゆ〜ゆのゆあ〜

荷兮

〜ゆ〜ゆのゆあ〜

李凡

雨の雲の角、やまき草  
 几多し一度ハ骨をわく世ハ  
 傾城ととくくを晨明  
 霧らら入流ふ人の影うつこ  
 りや〜〜〜と神輿〜〜里  
 寺后より半道奥の砂行と  
 花ふも男の帯きあつた  
 物よき陰をさ〜ら小鞠ふや  
 入〜〜目〜〜〜〜〜  
 入〜〜〜〜〜とま〜〜〜〜  
 ころか懐〜〜梓き〜〜あ  
 鳥安とた〜あるわ〜切あ〜  
 い〜〜〜〜〜とふ位の針を  
 松のあふも自〜門〜ら〜  
 ち〜〜の泣を〜え〜耐るを  
 朝顔豆腐と〜ふ〜ら〜  
 念解〜〜ふ秋あ〜〜  
 穂葉生ふ藏と〜ひ〜  
 雨桐 荷分 昌圭 重五 李瓜 雨桐 荷分 昌圭 重五 李瓜 雨桐 荷分 昌圭 重五 李瓜

花をさ橋のあふよ〜  
 傘の内を付ふちる雨の昏ふ  
 物無あ〜〜と家や〜〜  
 ね〜〜〜〜とあ〜〜  
 物無ひ〜河と二人〜〜  
 世ふあ〜〜馬〜ふ〜  
 託念ふ〜〜と城の萱 畑  
 い〜〜と花と竹〜〜  
 舟〜〜と色も〜〜ふゆ〜  
 雨桐 荷分 昌圭 重五 李瓜

三月六日野水亭あ〜

ち〜ら〜や〜河〜の八〜  
 ち〜ら〜ら〜ら〜ら〜の陸  
 夫の旅〜〜供〜〜ら〜  
 松風〜〜ら〜〜の海〜  
 賣の〜〜〜と〜  
 野水 且 兼 野水 荷分 越人 羽笠 執筆 野水

素あるはしんしんきんきん  
若町中川さきく二人髪剃ん  
吃わうり車甲くちち  
籠負く大津の浪ふつたうり  
何やらさんふあああ  
滋かあふさうりとあうて  
羨ふさくさくさく日のもら  
里人ふ暮とわとも秋の西  
舟ちきほり車石あく楢  
あうらるあふ花の籠さく  
瀧さきとさくの山  
のさくや花さくの使浮野の常  
内侍のさく入代くの眉の園  
おふり軍の中さく斤わさく  
やとさく粟とさく都甲さく  
大羊い念佛とさくつるさくも柳  
かのことき我うさく藤ふさく  
胡子のさくふのさくふ柏たさく

且 蕨  
越 人  
荷 兮  
且 蕨  
野 水  
越 人  
羽 兮  
野 水  
且 蕨  
越 人  
荷 兮

ふ古ふ古日まきまきの粉  
つねつる宿とさく入寺れまや  
ことと魂まのさくさくたの舟  
陽炎のもとのさくさくま歸さく  
さるゆへに奇いさくさく  
田とゆへさくさくさくさく  
力の節とつさく中の子  
澁や三井の末寺のさくさく  
さあひくのさくさく山のさく  
えつさくさく九日の月さくさく  
君のさくさくさくさくさく

羽 笠  
野 水  
且 蕨  
越 人  
野 水  
羽 笠  
野 水  
越 人  
羽 笠

三月十六日 田家

蛙たさくさく甲さくさく疎さく  
瓶あさくさくさくさくさく  
蔵さくさく木の真さくさくさく  
さくさくさくさく馬の子  
さくさくのさくさくのさくさく

野 水  
且 蕨  
越 人  
荷 兮  
冬 文

葉の穂を揺る 傘の端  
穢きもふ穂穂鬼の傍の集りて  
岩のあふあり 露見ゆる里  
るの日は 露燈やん 燈の河  
あつるさるの 燈の 一は  
あつるさるの 燈の 一は  
解て花あうん 枝むさく ね

執業 且葉 野水 荷兮 越人 野水 冬文

今宵いふくくくくくくく  
同十九日荷兮室々々々

嘆ききの菊ふいふくくくくくく  
秋の和ぬくくくくくく 順  
卯丁の声ふくくくくくく 大と并ぬ  
別の月くくくくくくくくくく  
別くくくくくくくくくくくく  
まのくくくくくくくくくくくく  
水とくくくくくくくくくくくく  
美のくくくくくくくくくくくく  
宿路くくくくくくくくくくくく

越人 且葉 冬文 荷兮 野水 越人 野水

連ぶりのくくくくくくくくくく  
波毒くくくくくくくくくくくく  
岩若くくくくくくくくくくくく  
むくくくくくくくくくくくく  
蓮二枚と 花若くくくくくく  
湖舟の落 あれくくくくくく  
甚くくくくくくくくくくくく  
舟のぬくくくくくくくくくく  
もぬの 隣のとくくくくくく  
あたまのくくくくくくくくくく  
はくくくくくくくくくくくく  
家まのくくくくくくくくくく  
解と 冷くくくくくくくくくく  
山は 新のくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく

冬文 越人 且葉 野水 荷兮 冬文 野水 荷兮 越人 野水 荷兮

追加

三月十九日舟泉亭

山吹のあつれくくくくくく

越人

蝶水はさくさくおろしそそー  
きほろろや暖かききききき  
り幸のうらやう波ふたき  
朝りともや川の流るのうらや  
月夜ささき花門へきききき

舟泉  
聴雪  
蝨鬘  
荷兮  
執筆

春

昌陸の松といふぬ唐代の春  
え日のあれるの競馬はあし  
初春のをやと牛乳をさ日か  
りこのさゆりやあり麦の茶  
門を松苗茶園のをささむし  
鯉のささゆりのささ梅白し  
舟くのさ松ふきのゆりきり  
暖のふれ物かきふひらきり  
橋てをえ日里の暖かきり  
早もくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく

利重  
重五  
昌圭  
雨桐  
舟泉  
羽笠  
且菓  
社團  
年々  
吞霞  
聴堂

朝日二分柳のうらや白ひか  
きぬてあまの東ひききき  
き橋てをえ日里の暖かきり  
のうれささ人のゆりきり

荷兮  
且菓

又くまの白ゆりのや夕うらや  
古池や花さくらむあゆき  
合法の暖り胡蝶のやうらや  
ゆき花の暖かき酒のやう  
花うらやむれてあまの東ひき

越人  
芭蕉  
重五  
亀洞  
越人

春野吟

足湯より湯を曲る春ささ川  
ふれと寺うらぬわのささ川  
振来まで花のささ川うらぬ

杜國  
李凡  
荷兮

餞別

着の花ささ川あゆり別うら  
山畑のささ川ささ川夕日か  
あゆり川ふれぬわのささ川

越人  
重五  
全

夏

ほろろききそそのしをの尾はもろ  
新衣さあけと寝てくぬる夜は  
わらわの松屋の春をたのめ一足  
らわらわの梅のついでに  
とあけのうらわらわの春の都  
今とくまで愛するねこな

九白  
李凡  
越人  
杜國  
龜洞  
舟泉

武花坊ととらうぬ

まろけやとて申くそのの夜は

高露

馬のうらわらわらわの月

聽雪

老聃曰知足之足常足

夕つり小箱はあつさききき

越人

葉木の松雨こらわらわの月

柳雨

はらわらわらわらわの月

塵交

さきさき花のついでに

荷兮

雪のうらわらわらわの月

全

曉のうらわらわらわの月

昌圭

夏川のうらわらわらわの月

重五

譬喻品三 界無安猶如火宅

とらうぬ心

六月のけのこを居る其の心

越人

秋

春のうらわらわらわの月

且藁

貧家のむすぶ

おまねくくむくくくく

越人

なまきくくくくく

雨桐

さくさく人をやまむる月

芭蕉

山寺のうらわらわらわの月

越人

なまきくくくくく

野水

八島とかなるる風月の夜

具をくくくくく

全

待恋

よめ殿とをくくく

荷兮

閑居増恋

秋のうらわらわらわの月

全

朝白のうらわらわらわの月

舟泉



冬

馬のあれ斗の夕日の村をよけれ 杜園

芭蕉翁と宿し一掃をく 大垣住 如行

雪のたつと葉のふりあはるうね 昌碧

るどましくうむるまきのわらわら 芭蕉

り燈の煤のこぼるるまきのめくれ 越人

芭蕉翁と宿し一掃をく時 杜園

これららの出づるまきのあはれ 杜園

隠士ふかぬる室をまうけて 荷今

はらうきこふ袋をくしをる 荷今

貞享三丙寅年仲秋下浣

冬好日

望ハ出逢のあはれをうらみ候後ハ

とあらしのあらしにわらわら

俺はくくくくくく人我とあはれ

ふかぬるむむむむむむのまは

園ふくくくくくく半と不園あはれ

出づるまきの

狂白くくくくくく竹をよけれ 芭蕉

もろくくくくくくくくくく 野水

有相のまゆふ酒をくくくくく 荷今

うららのあはれとあはれあはれ 重五

朝鮮のほろくくくくくく 杜園

日たらしくくくくくく 正平

我身とあはれとあはれ 野水

あはれとあはれとあはれ 芭蕉

り河くくくくくくくく 重五

きこぬるまきの 荷今

新法のいづくくくくく 芭蕉

冬の日

あふりいりんふとえー 壺 家  
 田甲なるこまんり柳若らさる  
 芳ゆきよ川人一とあんんわ  
 たそつれを標あまらむる月わたに  
 るぬりさういそ所ふちり居る  
 二の危ふと情の花のさうりきく  
 始むらぐらふとまのり鳥うのせ  
 のりおふ慮愁かほららある  
 今も眼のえとこいぬ川らえ  
 めせ人の記念の松の吹とまら  
 ぶとら一室紙のぬを休くいあ  
 せめまきておぼやめあうお何白  
 をうむとけけいんりうを菅  
 あらくと砕らら人の青う何  
 鳥城ハえいその園のさうらこ  
 あそれさの謎れとけけら云  
 秋也一斗りりつらまねれ  
 日奈の雪白う坊ふ月とさく

杜 荷 野 重 芭 野 荷 杜 芭 野 重  
 國 兮 水 五 蕉 水 兮 國 蕉 水 五

中ふ木樗ととさむ段階カ  
 うしの流とつらぬ草のうられふ  
 美く鏡の美といわくや  
 わのいのちあけこの空をよむんく  
 舞いはいりよめまゆらさふあき  
 後れよく在湯ふ志愛の花漏て  
 廊下ハ夏めくけはらふあり

荷兮 芭蕉 杜國 野水 重五

おもむくも仕年

いまこころをかと據らるる

さ川流のこころは流きくこころ  
 そわらふまことふる葉のり食  
 ゆき葉まてさ川流の流の羽を打て  
 うつらふまふれくらまひさんら  
 麻呂う月神入鞆教さあはるん  
 権をとり多なる負越りあ  
 るとなるは音の田柳わらんで  
 奥のきせきとふたふとふあふ

芭蕉 杜國 荷兮 重五 正平 杜國 芭蕉 重五

冬の日

庭よりく流るる水はさかたけの男  
 庭さきまの竹の根はさかたけの男  
 けとくしと夜とちをる力なき  
 鳴りたりとくさへくびさうせん  
 小まらふとまらふとせはらうとく  
 月ハ遠つては 牡丹めく人  
 渾あまのくくくくやれ 望まて  
 ちゆくくくく 地系切町  
 初九の世とまら 娘のいふく  
 うらんわくくく けまらくくあめ  
 様もくくく けまらくくあめ  
 うらんわくく けまらくくあめ  
 源さくく けまらくくあめ  
 とけりくく 不破のせき人  
 及まらくく けまらくくあめ  
 けまらくく けまらくくあめ  
 奉加めく けまらくくあめ  
 けまらくく けまらくくあめ

荷分 芭蕉 野水 重五 杜園 荷分 野水 芭蕉 重五 杜園 荷分 野水 芭蕉 重五 杜園 荷分

庭よりく流るる水はさかたけの男  
 庭さきまの竹の根はさかたけの男  
 けとくしと夜とちをる力なき  
 鳴りたりとくさへくびさうせん  
 小まらふとまらふとせはらうとく  
 月ハ遠つては 牡丹めく人  
 渾あまのくくくくやれ 望まて  
 ちゆくくくく 地系切町  
 初九の世とまら 娘のいふく  
 うらんわくくく けまらくくあめ  
 様もくくく けまらくくあめ  
 うらんわくく けまらくくあめ  
 源さくく けまらくくあめ  
 とけりくく 不破のせき人  
 及まらくく けまらくくあめ  
 けまらくく けまらくくあめ  
 奉加めく けまらくくあめ  
 けまらくく けまらくくあめ

荷分 芭蕉 野水 重五 杜園 荷分 野水 芭蕉 重五 杜園 荷分 野水 芭蕉 重五 杜園 荷分

杖とひくく 僅く十歩  
 けとくしと夜とちをる力なき  
 鳴りたりとくさへくびさうせん  
 小まらふとまらふとせはらうとく  
 月ハ遠つては 牡丹めく人  
 渾あまのくくくくやれ 望まて  
 ちゆくくくく 地系切町  
 初九の世とまら 娘のいふく  
 うらんわくくく けまらくくあめ  
 様もくくく けまらくくあめ  
 うらんわくく けまらくくあめ  
 源さくく けまらくくあめ  
 とけりくく 不破のせき人  
 及まらくく けまらくくあめ  
 けまらくく けまらくくあめ  
 奉加めく けまらくくあめ  
 けまらくく けまらくくあめ

杜園 重五 野水 芭蕉 荷分 正平

○冬の日

くらしたまふ小相ふむ娘くくくく  
 燈籠ふくくくくくくくくくくくく  
 つゆ秋のきまふ入カと解をきん  
 ちるまきくくくくくくくくくく  
 朝月夜双六くちの娘あくく  
 ちる買みちふほくくくくくく  
 ちのく入海のおとくくくくくく  
 合口障のちくくくくくくくく  
 まくたすくくくくくくくくくく  
 佛舎くくくくくくくくくく  
 縣あるえれえ治所と作れて  
 五形<sup>ゲ</sup>草の<sup>ク</sup>畠<sup>ク</sup>六<sup>ク</sup>反  
 うまうくくくくくくくくくく  
 ままのくくくくくくくくくく  
 ちくくくくくくくくくくく  
 ちるのちくくくくくくくく  
 けくくくくくくくくくくく  
 鳴りとくくくくくくくくくく

重五 杜園 芭蕉 野水 荷分 重五 芭蕉 杜園 野水 荷分 重五 芭蕉 杜園 野水 荷分 重五

雪の杜園の園のまうくくく  
 御くくくくくくくくくくく  
 あくくくくくくくくくくく  
 芥子のくくくくくくくく  
 三日月のちくくくくくく  
 輝明くくくくくくくく  
 まくくくくくくくくくく  
 ちくくくくくくくくくく  
 うけくくくくくくくくく  
 おのくくくくくくくくく  
 ちるくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくく

荷分 芭蕉 重五 野水 荷分 重五 芭蕉 杜園 野水 荷分 重五 芭蕉

ちくくくくくくくく  
 ちくくくくくくくく

ちくくくくくくくく  
 ちくくくくくくくく  
 ちくくくくくくくく  
 ちくくくくくくくく

重五 荷分 杜園

鶴つるまことの月うららあり  
 う勢の社の日暮ふ酒あきる  
 若減るまこと市ふ振さる  
 都を川や烟塵千代をう散る  
 しくくらの舞を川うららあり  
 柳のふこと布揺あやうをれて  
 う葉いそこちと散る三平  
 折られてらねう舞の離れも  
 火あぬ巨燈あまんと又ん  
 門さのまふ糸まうりて存る  
 血刀うらげ月の啼きこり  
 身うらうく本所の侍さつき  
 うまのつ御をうらうらあり  
 ちねの巨板の敷きまをうら  
 傍りのうら敷きまをうら  
 白燕ほらぬあうらとほい  
 宜うらうらうら 叙と染る  
 八十年とこの入る童あまう

十

野水 芭蕉 羽笠 荷分 重五 野水 杜國 荷分 重五 野水 芭蕉 羽笠 荷分 重五 野水

かりうらうらむむるセウのつま  
 西南小柱の葉の川むむとた  
 蘭のあやうらうト本う川春  
 跡のあふ置つたる女えてうら  
 肉籠う葉とあらうらうら  
 うやうまうたまりうらうら  
 つみもあうら 希葉の文  
 富のりは具と酒客のまをうら  
 うらうらうらき 南葉の光  
 うらうらうらうらうらうら  
 うらうらうらうらうらうら  
 うらうらうらうらうらうら  
 うらうらうらうらうらうら  
 うらうらうらうらうらうら  
 うらうらうらうらうらうら

杜國 羽笠 荷分 重五 野水 芭蕉 羽笠 荷分 重五 野水 芭蕉 羽笠 荷分 重五 野水

田家眺望

田家眺望  
 鶴の羽うらうらうら

荷分

その朝日のあまをれありけり  
 櫻拾山あけ侍を木葉ふれ  
 ひさきまのころの燈をなれけり  
 昔も花を具さる月のあけと  
 酌する童蘭切りいいて  
 秋のころ花の山連歌のころふ  
 所々をわくふるまふ寺  
 寂として花の影のあるる  
 多ふふ花とまむの影のま  
 粧進ふ鳥帽子の女ふふ十  
 衣をくふる借るころの影を  
 ありふふと山裾にけりけり  
 麻のつりとりふあめあむ  
 けとまて拍子音と世をけり  
 花月あふふあけありなる  
 花の影をふふあけと井井  
 花葉ゆつと木瓜の山あけ  
 昔とまてけりけりけりけり

芭蕉 重五 社園 荷兮 芭蕉 羽笠 野水 重五 社園 荷兮 芭蕉 野水 羽笠

毛舎の暮をとりらふあけけり  
 花のころ小屋とけりねと拾ひけり  
 花葉をけり進むふけりまむと  
 丁にけりける年花の角をの影をけり  
 花葉をまむとに笑園はけりけり  
 芥子あまはけりけりふあけけり  
 けりけりまふのあけまむとまむと  
 花のころふ花をのまけりけり  
 花のあけまむとけりけり  
 花のあけまむとけりけり  
 花のあけまむとけりけり  
 花のあけまむとけりけり  
 花のあけまむとけりけり  
 花のあけまむとけりけり

荷兮 社園 重五 芭蕉 羽笠 野水 重五 社園 荷兮 芭蕉 野水 羽笠

○冬の日

追加

けふふんももて難面しきうら愛 羽 笠  
 野ちああうるのねちうの雲 荷 兮  
 ゝくこと別もふふ發とるまきて 重 九  
 椿まうふふとや何ぞ朝の空 杜 國  
 浪りい 輪のふん月と海 芭 蕉  
 のくふふ椿とまうの波阜山 桂 水

ひさこ

江南の珠碩多うひさこを送りこれい  
 是の情をとり酒とあまらむ器もを  
 あゝの或る大椿ふ遠るまは細をわて  
 化といふるふくも異なり吾まは後  
 の恵をうけて用ふるまをいさふの  
 清くくきくはほほり小睡うあやう  
 てはうち山端の野をくまふ日月陽秋  
 きらりりうらして雲のあげわの園の  
 静らをもうけらるるまはくたわら  
 ら人ともらえききまうて皆風雅の  
 深思といふことまはくははらわれ乃  
 やまはらうらう乾坤のわらうまを  
 出くおのこをまはく毎日けはゆふま  
 へん

元禄三六月

越智 越人

〇五二

花見

春のゆくふけを 終りも惜うけ  
あ日姑とうふよきと天鳥あり  
旅人の風うきゆくまられて  
なまじおをぬち力の 替  
月ゆく熊の目裏の目石  
趣向つらるぬりまやま居  
鞍馬の三歳駒ふ秋の末て  
あふさまくく山浮登る 雨  
入山ふ強討の痛傷のうき  
中ふとぢんののうきと山伏  
りふるを唯一方へあふ  
むきまをゆふうきつりつ  
おわりふあふもの陰下せう  
月える春の社をさへはゆ  
秋風の舟をさへる波の音  
厚ゆくくくや白子あき  
ふ秋淡糸のとうりのつり田

翁 歌 曲

水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁

順後みあれ 道のうけらふ  
けらうと 姑の尻をあらある  
ふちほらうあふうきとまき  
羅う目といをさへるあふ  
熊野うきとと泣かふまき  
ふあふ紀の園をの 視  
濁てまけらるあふまら  
双六の目を配くまてまき  
彼の持佛うむらふ念佛  
中ふふ古るふ居るのあふ  
日くあふ里のなふらふのあふ  
惜れくくぬ確の杆と美  
月あくくくく明とるる月  
花まきとあまう折をくら  
唯四方なる草庵は 露  
一貫の海むつとくく  
學者のくくくハ 飲ぬを別  
さくけをさるあふと久廻

水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁

○ふさこ



此よりゆくまの山中 碩

翁主 珙碩主 曲水主

珙碩

翁

路通

りんくのもちむらうや春のま  
 うれて松のまはさえぬ家  
 蝙蝠のたつふつらさき  
 空を渡る鳥の音 水鏡  
 はるのまのまとうまはふらふら  
 秋のまのまのまのまのまのま  
 こころのまのまのまのまのま  
 うつらうのまのまのまのまのま  
 山あふのまのまのまのまのま  
 鏡水のちのまのまのまのまのま  
 念佛のまのまのまのまのま  
 うつらうのまのまのまのまのま  
 庭障のまのまのまのまのま

全碩 全通 全碩 全通 全碩 全通

眺めとまのまのまのまのま  
 花にあふのまのまのまのま  
 志のまのまのまのまのま  
 生細あふのまのまのまのま  
 は村のまのまのまのまのま  
 とろまのまのまのまのまのま  
 うまのまのまのまのまのま  
 まのまのまのまのまのま  
 たつらやまのまのまのまのま  
 うまのまのまのまのまのま  
 まのまのまのまのまのま  
 文珠のまのまのまのまのま  
 かな加減又のまのまのまのま  
 何のまのまのまのまのま  
 志のまのまのまのまのま  
 まのまのまのまのまのま

越荷

全碩 全通 全碩 全通 全碩 全通

〇ひま

汗の香をかぐくをとりけし  
ふきりよるをちちあけてふ  
たきり又百人の指をり  
まの腕をとりめをさる

人今今

珍碩九翁一路通八荷兮十  
越人八

城下

淡炮のをさふるや丹  
砂の少麦の穂くをらく  
る風ふま守やの少貝拾せそ  
なまぬる一川湖ひうひり  
其のさうひ二人あつる有るふ  
秋の秋麦の穂まうのそふ  
女手花ふ細糸ふおろりて  
目の中おろくをさうちる  
さう又川系ゆとよわらえ  
秋のさう一をせんてさう

野經  
里東  
泥土  
乙州  
怒誰  
珍碩  
野經  
里東  
泥土

馬あ石砂を後をさうやさく  
一里をさう山の下 芥  
又知くきて思ふふはあられを  
おれ世々なまてをさうと  
さうあふつれく丁百の砂  
月さふを屋をさうさうせ  
羨志めの産のさうさふ  
くらあふ付ておれさうれす  
半氣遠の坊を泣出を  
のみあり居居の差のさうさ  
古をさうさうの砂を漁食  
はくは百粒まうて鳥帽をさ  
配所をさうさ供所の蛤  
さうさうさうさうの法をさ  
連と力をさうさうさう  
か風の大里寺繩をさうさ  
貴のさうさう用叶へさ

乙州  
怒誰  
泥土  
野經  
乙州  
珍碩  
里東  
怒誰  
珍碩  
乙州  
野經  
里東  
乙州

ひさこ

糊剛を夜ふちひさきとほりて  
ゆくの月ふ茶食喫出と  
看経の密ふゆきと唯氣  
四十八巻のうらうらと  
髪くせふ松の端と藤色  
解と細目くあらくく  
松村の花ふまふふ面を  
田の尻濁り苗のとりさ

泥土 怒誰 野經 乙州 里東 珙碩

野經六里東六泥土六乙州六  
怒誰六珙碩五筆一

雜

龜の甲車らうり時を啼りせ  
唯牛糞ふ風のふくき  
百姓の本俸仕舞をわのき  
小あそろふうらうら  
将森く奥の男はらと松の  
端端あらくきやるり

乙州 珙碩 里東 探志 昌房 正秀

秋萩の序米ふちうき防う  
風名の加城の志川うあり  
雲のまきとまうして啼  
まのやうなるかまをこの  
て川花ふ経のせを移居  
人のととふ急とあをける  
は屋の番ふ吹とまの  
藤てくくおくまの  
後ハの中をさけて月あり  
すくと京もなるやと  
まふ登る洞の町舎の今年  
雀とさふふのぢとん  
く付星るりいんうと  
体いんちうふのわうぬ  
遠てうとふ松松の  
探あまされてまうとあけ  
鳴りうふ茶催の下とや  
借馬と鳴るままより

及有 野經 二嘯 乙州 珙碩 里東 探志 昌房 正秀

いさくさくさく 養一まぢふ 梗花 及肩  
 むくくくくく 額 柳の秋 野 經  
 けしんくく切符の紙デふ風きて 二 備  
 幸かの序ふもほのう成月 乙 州  
 喰ゆふ味のつくくを 眺り 玆 碩  
 嬉 掃うちハ次 了 辰 登る 里 東  
 目とめ 寸毫のうととどう 何そ 探 志  
 ろんふとくくく 名と 侍 昌 房  
 多し 一ふふ 杖 秘ちて 濡あさけ 正 秀  
 渾と 集る 寺乃 上 茂 及 肩  
 是の流 登の 日 給ふ さらど まで 野 經  
 こくくふ ねん 柳子の 毛 風 二 備

乙州四 玆碩全 里東全 探志全  
 昌房全 正秀全 及肩全 野經全  
 二備全

野 田 野  
 野道や苗代時の角大師 正 秀

明也たのまむ 野 麓の 秋 玆 碩  
 晴ふとのわやくふゆく 去の 空 全  
 かましく 幸の 一き 門口の 文字 秀  
 月 影く 利休の 衣と 鼻あを 全  
 衣く 半と 世を ころく あり 碩  
 色ハ 皆つ 流く くと 鳴やむ 秀  
 丘 多く くの 木 後と 門 ぬる 碩  
 世 文と 百由と せと せ 別 縁ふ 秀  
 なまこくくく くり 枕の 侍 碩  
 酒 丁ハ さまと ぬあ 自 中 あり 喜 不 秀  
 靴の ぬる ち かり ち やる 碩  
 月 亦る 野 毛の 空 結 宿 河 秀  
 せ 程ふ 辰と くる 俗 色 進 ます 碩  
 け ぬと せ ち 旅と け ぬ せ けて 秀  
 福 あり あり とも 縁 結 あり 秀  
 江戸 園と せ ぬ 辰ふ せ けり 秀  
 あ みの 山 渾 ち くの 入 道 全  
 せ ち 花 町 里ハ 脱 糞と せ ぬ 一 碩

〇ひこ

古と吹くく居る禪門の祖父  
 本堂はまこと慈愛のまゝら地  
 羅後の後志あつた後いぬ  
 蓋と痛人の乃命を治りて  
 善くまゝにむむまゝに應るり  
 善く徳の定ふ紙鳩と持知る  
 口と果ぬいふまの厨宜  
 まやまゝよ小刺りまゝ草袴  
 秋の節も 抱 持の徳本  
 美り後も言て月えり後若ぬ  
 奈布子ひひく川おきこり  
 涙山々元めくと吃られて  
 呼ありけりれ 猶ハ守りて  
 子親も小人所のるあうり  
 中しんか 風木の芽も之 三  
 ちまはふまを踏引るる考あり  
 山陣のる筋ふもゆるかけらふ

正秀十九 珍碩十七

秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀

猿みの

晋其甫序

俳諧の集つる事古今よりわも程  
 此は昔の如く記為る事同あれや勿  
 の身一つてを治りて 魂の入りて  
 ゆゑに 世のまゝに 世のまゝに  
 く世のまゝに 世のまゝに 世のまゝに  
 不度れ 世のまゝに 世のまゝに 世のまゝに  
 及もまゝに 世のまゝに 世のまゝに 世のまゝに  
 かり波西りど人の背よりて人ど作り  
 々々々々 世のまゝに 世のまゝに 世のまゝに 世のまゝに  
 らんゆゑに 世のまゝに 世のまゝに 世のまゝに 世のまゝに  
 とれ石の表のわつ流さるはる魂の法  
 けおろそこのまゝに 世のまゝに 世のまゝに 世のまゝに  
 ひのくまゝに 世のまゝに 世のまゝに 世のまゝに 世のまゝに  
 りうれん 世のまゝに 世のまゝに 世のまゝに 世のまゝに 世のまゝに  
 不魂の入りて 世のまゝに 世のまゝに 世のまゝに 世のまゝに 世のまゝに  
 脚のころほを越へるるら申すまゝ

○猿しの

精々小善と云ふを以て伽藍の精と入  
 るる事なしは流傳あたるといふ事  
 のと叫びて善を以て善と云ふ事  
 ありと云ふ事と云へては集とつら  
 くて精々善と云ふ事付中しと云ふ事  
 う事と云ふ事と云へては魂と云ふ事  
 去来凡兆の事と云ふ事と云ふ事

を

物々々を積りて善と云ふ事  
 あらむ事けし時ある事の序の事  
 時なきや並ひく事の事  
 来入り時ありけり事の事  
 後物の程積りて事の事  
 唐ははやい事と云ふ事  
 舟人よめりて事と云ふ事  
 伊豆の境と云ふ事  
 ちやうどと云ふ事の事の事  
 一と云ふ事の事の事  
 二と云ふ事の事の事  
 三と云ふ事の事の事  
 四と云ふ事の事の事  
 五と云ふ事の事の事  
 六と云ふ事の事の事  
 七と云ふ事の事の事  
 八と云ふ事の事の事  
 九と云ふ事の事の事  
 十と云ふ事の事の事

○藤この

芭蕉 其角 千那 丈草 正秀 史邦 尚白 曾良 凡兆 乙州 羽紅 昌房 去来 百歳 野水

其角  
 今  
 元光  
 嵐蘭  
 芭蕉  
 元兆  
 其角  
 土芳  
 裾道  
 越人  
 猿雖  
 元兆  
 其角  
 全  
 元光  
 嵐蘭  
 芭蕉  
 元兆

其角  
 全  
 元光  
 嵐蘭  
 芭蕉  
 元兆  
 其角  
 土芳  
 裾道  
 越人  
 猿雖  
 元兆  
 其角  
 全  
 元光  
 嵐蘭  
 芭蕉  
 元兆

霜月朔旦

良品  
 不玉  
 且葉  
 去来  
 探丸  
 尚白  
 龜翁  
 元兆  
 芭蕉  
 其角  
 元兆  
 芥境  
 半残  
 大草  
 曾良  
 去来

貧文

○猿の





維とらん建ちのしこもりのこひ 長崎 卯七  
ひつつけくりやきふのしこもり 去来

青蓮追悼

乳のころのふせと後しころ解毛か 尚白  
ころ解毛いそ色の藤もきこの内 芭蕉  
降るころあそれのたふぬあもの 乙羽  
一月の我ふあふせ御くつき 文草

往吉奉納

お那ふや鼻息白一面の内 伊賀 其角  
弟をなれふ又のしこもり 全 順琢  
あふやふらふし 全 祐甫

乙羽う新巻

ふふれと買せし我ハ年忘 芭蕉  
弱法師我門の中せ雁の札 其角  
歳のおやふる徳又ときけいし 全 長和  
うけ巻のつぎふらふし 全 去来  
ふふれと買せし我ハ年忘 全 全  
ふふれと買せし我ハ年忘 羽紅

やうして又やふらふし 全 其角  
しはくくとふふらふし 全 路通  
しはくくとふふらふし 全 杉瓜

夏

有明の面おともやほし 全 其角  
ふふらふし 全 木節  
ふふらふし 全 芭蕉  
ふふらふし 全 尚白  
ふふらふし 全 九兆  
ふふらふし 全 智月  
ふふらふし 全 史邦  
ふふらふし 全 羽紅  
ふふらふし 全 文草  
ふふらふし 全 去来  
ふふらふし 全 奥  
ふふらふし 全 易

○猿の

猿の毛衣とよめり 全

松崎や竹ふもどろけほきき 曹良  
うそ我どろけしめしよらんこそ 芭蕉

旅館をききしをききとんす

四月八日詣慈母墓 膳所 曲水

あめふらうしうくくくくくく 其角  
まうくれぬ花と牡丹の姿くれ 全峯

別僧

ちんちんちんちんちんちんちん 越人  
ちんちんちんちんちんちんちん 珎碩

あふけられてとまうけうふ  
わんわんわん

似合しとくしりのまや法どめ 杜人 杜國  
まきまきまきまきまきまき 嵐蘭

井はまきまきまきまきまき 半残  
起ぬておふまきまきまきまき 仙化

起くのふくくくくくくくく 仙化  
題去来之嘆賦落柿合三句

豆植る畑も少欲ゆえなす 元兆  
破屋やいとと兼子のかみひ道 曾良

南都旅店

誰のそくくくくくくくくく 千那  
洗濯やまきまきまきまき 薄芝

豊國うく

竹の子れ力と誰ふくくくくく 元兆  
くけのふや島唄くく悪を布 去来

たすのこや稚ま時の信のまき 芭蕉  
徳ふゆうつうくくくくく 正秀

明石夜泊

晴毒やうくれきまきまきまき 芭蕉  
まうけや流麻ふくくく 越人

八月うくくくくくくく

扇形骨くくくくくくくく 其角  
穂結くくくくくくくく 芭蕉

浪原のまきまきまきまき 岩翁  
さひのふくくくくくくく 尚白

○様よ

六月廿日大坂より死の途より

伊賀 蟬吟

大坂や元禄より此夏の六十年

夏州や岳のたう夏の跡 芭蕉

這あよかひをうりれ境のみ 全

此境をむかへるわらわら

このののりや

かろくろ角うりてけしはたぬえ 全

あはるふあうりてかあらる 九兆

はは夏の味なるとやあはる 木節

まとの習治舟ありさつとる 大邦

奥羽各五の郡ふ入て中ねるの

の坂いづつこややとよはるまは道より

一里はとくりたうの方まはる

あふあふとさつとさつとさつと

あはるあはるあはるあはる

さつとさつとさつとさつとさつと 芭蕉

大和紀伊のさつとさつとさつと

ははの順礼をさつとさつとさつと

ははの料をさつとさつとさつと

つくりゆえさつとさつとさつと 去来

整利やつ後不痛く又月雨 九兆

りのなや葵 傾く又月 芭蕉

ははやさつとさつとさつと 羽紅

七千金の老路をさつとさつと

さつとさつとさつとさつとさつと

けるその老路をさつとさつと

はらふえさつとさつとさつと

わらふよさつとさつとさつと

さつとさつとさつとさつと

六月廿日かおくさつとさつと 其角

百世をさつとさつとさつと 去来

さつとさつとさつとさつと 正秀

つくり合ふたのさつとさつと 游力

孫をさつとさつと

○後この

まろきまのあしきやうらむ 智月  
まろきまのあしきやうらむ 花紅

まろき川の園こころ 芭蕉  
まろきのまろきや奥の田植こころ 芭蕉

眉掃と面影あしき 全  
法隆寺用帳南無佛のまろきを拜せ

内袴のまろきまろき 千那  
田の畝のまろきまろき 万乎

膳所曲水まろき 去来  
まろきまろきまろきまろき 去来

勢田のまろき二句 九兆  
まろきまろきまろきまろき 芭蕉

三楚野へ清きまろき 田上尼  
まろきまろきまろきまろき 尚白

まろきまろきまろきまろき 半残  
まろきまろきまろきまろき 半残

病後

まろきまろきまろきまろき 何処  
まろきまろきまろきまろき 乙羽

銭別

まろきまろきまろきまろき 嵐蘭  
まろきまろきまろきまろき 嵐蘭

まろきまろきまろきまろき 里東  
まろきまろきまろきまろき 里東

まろきまろきまろきまろき 其角  
まろきまろきまろきまろき 其角

まろきまろきまろきまろき 文草  
まろきまろきまろきまろき 文草

まろきまろきまろきまろき 嵐雪  
まろきまろきまろきまろき 嵐雪

藤の

まろきまろきまろきまろき 探志  
まろきまろきまろきまろき 探志

まろきまろきまろきまろき 芭蕉  
まろきまろきまろきまろき 芭蕉

まろきまろきまろきまろき 槐市  
まろきまろきまろきまろき 槐市

まろきまろきまろきまろき 九兆  
まろきまろきまろきまろき 九兆

まろきまろきまろきまろき 千那  
まろきまろきまろきまろき 千那

まろきまろきまろきまろき 史邦  
まろきまろきまろきまろき 史邦

素堂之蓮池邊

白五や蓮一枚の枝あこま  
 日影のほや時つゝくく  
 日の暮るこ 鹽の底の蟻あか丸  
 夕のあやこうれてそきこ牛のた  
 たるあやこ 藤ふよれハ  
 志のんこの葉さく風をあつりし  
 夕のあやこうれてそきこ牛のた  
 千子うさまうらうらとまきこみ園  
 ようりまきまうらうらとまきこみ園  
 ちりまの少神も今や土用干  
 むきまのやあな合くらぬきま  
 志まうらうらぬれハ涼き夕ハ  
 夕まうらうらぬれハ涼き夕ハ  
 唇くまうらうらぬれハ涼き夕ハ  
 月影や思の家のらを 粧  
 芭蕉 乙効 丸兆 全秀 木節 野童 羽紅 巴山  
 芭蕉 宗次 丸兆 千那 曾良

夕まのや風並ひらるるそ  
 ちまを 流あか  
 去来

そまのこ今のは敷よ似と物大道  
 道

秋

秋風や葉をちりちりま  
 不知讀人

此夕東武よりきこむ素堂

夕まのや風並ひらるるそ  
 芭蕉を六のちりちりま  
 人少のちりちりま  
 加賀の全昌寺山宿す  
 路通 環碩

夕まのや風並ひらるるそ  
 芭蕉を六のちりちりま  
 人少のちりちりま  
 加賀の全昌寺山宿す  
 路通 環碩  
 曾良 山川 丸兆 去来 野童 芭蕉

合款のあはれまじりしるくしるれ 芭蕉  
 七よきりしるくしるくしるくしるく 伊賀<sup>イハガ</sup>中<sup>ナカ</sup>半<sup>ハン</sup> 杜若  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり 去来  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり 伊賀<sup>イハガ</sup> 風琴  
 鼻やめくこの鼻のほくしるく 膳所<sup>テシヤ</sup> 及肩  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり 杉凡  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり 千那  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり 史那  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり 且菜  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり 子尹  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり 羽紅  
 八咫おそくふたつしるくしるくしるく 羽紅  
 又ちりちりちりちりちりちりちりちり 去来  
 まゆまゆ 木のきのくしるくしるく 元兆  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり 去来  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり 去来

多新よそねりちりちりちりちりちり 平田<sup>ヘイデン</sup> 李由  
 元禄二年翁ふくせられてしるくしるく  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり

病辱のねりちりちりちりちりちり 芭蕉  
 ほちのあはれちりちりちりちりちり 同  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちりちり

○葉の

そらわくや花をよめてつねに月夜 風夢  
つせよまらうてらう時

昔月や去後よほる人よあん 七人 千子  
こころよふ養のあそまよふくう

栗の押し目かをあらぬこの月夜 半残  
月をせん伏見の飯の枝 郭 去来

翁と茅をふきし  
伊賀 土芳

加茂よ緒 あそふ候のつらゆき  
かの人たねこの秋の  
郭 伊賀

月影や栂のやみし 懐のこ 史邦

とてまらうてらう  
伊賀 卓袋

おちあふしとくそえ送る胡弓吹 伊賀 乙洲  
とて城まややうしとけ月影の秋

糸の麻袋まよひの月と人傍仲間 文草  
吹風のおもひやきよ月一川 九兆

空のまらうてらうふらうな月のも 尚白

向のよきあそひ月をさる 曾良

元禄二年つらうれえれとて月と  
そそ気比の心ゆき緒はらと人の  
古例とてきく

月影 花ののわたる砂の上 芭蕉

仲秋の望 猶子と送る糸とて  
うらま秋の月とそあそひつらう  
勝所 去来

明月やまゝの寺の葉はあつら 勝所 昌房  
月をせん人の旅よつらうそそ

借心ののりゆきのやをのきあそひか 尚白  
初瀬やつらの信の花柳 亦 九兆

一戸やをりやうらうそそゆえ 去来  
押の穂のさるゆきとてきく  
越人

温糟やかきまら 谷と荒島 正秀  
つらまらうてきくつらうつらう 麓 麓

一鳥不鳴山更幽 九兆

物のまらうてらうとてあそひまら 曾良  
むらうてらうとてあそひまら 曾良

○猿の

旅籠桑のつと合新の江戸千里

晴岫の浮舟桑の蒼麦畑 珠碩

よりのとらるるそや秋の天 九兆

舞つるはと者く一籠つる 半残

田令間のうすなふるそく葉の尚 尚白

茶をこゆる端まらしく丸あうり 其角

言ちまふ齧の鳴りやをらるれ 珠碩

くたはのわりのくく籠の秋 土芳

梅つづく梅あはむじくうふね 九兆

自題落柿舎

折めりや梅くちうさくし山かみ去来

あしはやゆしつ梅の下おまかみ塵生

此きく一牛切山のうすのさく 九兆

俳句

これいそこひあひ拍子のあはる

俳句桑の籠くう川き 蚊足

梅さくくあつまめりくも

花さくくさくあはるとまらり小 嵐雪

り秋の只み日晴るさくた 文草  
まあも秋の夕や風わらう 九兆  
世の中ハ鶯籠の尾のひまうら 全  
梅奥の島あをさうく秋の音 荷兮

春

梅咲くく人の愁の悔もある 露沾

上臈の山にふましくくくふ

候一もあつま

梅り香や山溪擁入たのまう 去来

梅くも香を入るハ牛の角かみ句空

庭真

梅り香や砂利一と流とをの奥 土芳

く河津や雪あまこさうし梅の花 半残

梅り香や河のうらひのせしき膳禪氣

くまのめをばつれとを徳のこり 其角

子良館の後小梅吹くくつて

はるあはる子のつりくくく梅の花 芭蕉

○猿の



應教や倦くくしの秋の梅 千那  
所後く向うあうむじはね 九兆  
日當りの後何ううや肩牛房 支函

暗香浮動月黄昏

入おの梅ふまりさゆきう丸 瓜房  
武はふあむむく旅亭の縁友  
藤ううしき定の細目や 乙品

幸未のくし海舟のうりつこし  
けうふりて梅の目ふさうう花に  
旧友荒恋うえあうこのまやうんを  
あまのそこのあるとりうらふあう  
此やうふいそこれもあうて感節  
あまのそこのあるとりうらふあう  
そのあつたあふらうしきまては  
七人のうらうらうとあう  
あまのそこのあるとりうらふあう  
百八のうらうて迷ふや 其角  
ひらう梅は花あうし 其角  
去来

憶翁之客中

野畠やる遊のけく梅るま 史邦  
その前やるあふ梅るま 嵐蘭  
あまのそこのあるとりうらふあう 如行

旅れそく葉とつてあうん草花 嵐雪  
つらげく梅けうしきまては 路通  
七持や梅ふらうしきまては 其角  
あまのそこのあるとりうらふあう 文草  
うらうらふあうしきまては 其角  
梅うらうらふあうしきまては 全  
梅うらうらふあうしきまては 去来  
あまのそこのあるとりうらふあう 一  
うらうらふあうしきまては 溪石  
あまのそこのあるとりうらふあう 其角  
うらうらふあうしきまては 九兆  
あまのそこのあるとりうらふあう 奥日  
あまのそこのあるとりうらふあう 探丸  
あまのそこのあるとりうらふあう 江戸  
あまのそこのあるとりうらふあう 宅

○梅の

垣こしよそくしてさるる柳 ハ 遠水  
よそく川柳さふらさき柳 ハ 尚白  
まろ柳のまろい柳のほふ ハ 一啖  
まけや拾いうそ 揚のまみ ハ 木白  
侍甲の西月わさやとくく月 ハ 揚水

田家少在く

まろくしよそくしてさるる梅のま ハ 芭蕉  
くろくまきしおのひ切時梅のま ハ 越人  
くろくまきしおのひ切時梅のま ハ 去来

露沾公少て餘寒の當座

まろくしよそくしてさるるぬぬぬ ハ 龜翁  
ゆの梅のまろくしよそくしてさるる ハ 尚白  
まろくしよそくしてさるる ハ 龜翁  
まろくしよそくしてさるる ハ 嵐雪  
まろくしよそくしてさるる ハ 九兆  
まろくしよそくしてさるる ハ 其角  
まろくしよそくしてさるる ハ 尾巖  
まろくしよそくしてさるる ハ 杉峯  
まろくしよそくしてさるる ハ 元志

陽きや取つこころある雪のそ ハ 荷兮  
うしろくやまのそれさぬらら ハ 百歲  
かけらやほろくくさるる舞の舞 ハ 土芳  
いよりのいよあそくく ハ 水固  
野まふふそあそくく ハ 九兆  
うけらや ハ 芭蕉  
いよあそくく ハ 配力  
初脊のちりよ ハ 嵐雪  
初脊のちりよ ハ 踏通  
まろくしよそくしてさるる ハ 野水  
まろくしよそくしてさるる ハ 九兆  
まろくしよそくしてさるる ハ 沢雉  
まろくしよそくしてさるる ハ 嵐虎  
まろくしよそくしてさるる ハ 猿  
まろくしよそくしてさるる ハ 芭蕉  
まろくしよそくしてさるる ハ 史邦  
まろくしよそくしてさるる ハ 羽紅

○猿の

泥龜や苗代木の畦つゝい 史邦  
 鴨くまうらふ草の竹や虫の糞 昌房  
 振後やひたよあまきこの終 去来  
 ちうふふらうまれ終のむの気 萩子  
 柳柳くまうらあうまるとんあの子 羽紅  
 りりの花境まうらぬ終柳下 三河 鳥巢  
 里人の梅あうらうら田原うら 嵐推  
 だうのあうらうらあうらうらあうら 如良山 半残  
 紙あうらうらあうらあうらあうら 柳 秋  
 わのあうらうらあうらあうらあうら 伊賀 園 凡  
 日のあうらうらあうらあうらあうら 珎 碩 凡  
 芳あうらうらあうらあうらあうらあうら 土 芳  
 雲のあうらうらあうらあうらあうらあうら 芭蕉  
 越より花あうらうらあうらあうらあうら 芭蕉  
 ふらうらあうらあうらあうらあうらあうら 芭蕉  
 柳のあうらうらあうらあうらあうらあうら 九 兆  
 うらうらあうらあうらあうらあうらあうら 伊賀 石 口  
 りやうらあうらあうらあうらあうらあうら 杉 凡

ひくろりの中の柳まや組まのふ 芭蕉

芭蕉庵のうらうらと物

夢まよふ海あうらうらあうらあうらあうら 曲 水  
 水ぬ柳あうらうらあうらあうらあうらあうら 山 店

畫 韻

山吹やうらうらの信がのふふあ 芭蕉  
 向ふのあうらうらあうらあうらあうらあうら 車 乘

紫うらうらあうらあうらあうらあうらあうら

并わらうらあうらあうらあうらあうらあうら 枝 羽 紅  
 堀中やうらうらあうらあうらあうらあうらあうら 津国本 坂上氏  
 夢のうらうらあうらあうらあうらあうらあうら 芭蕉  
 うらうらあうらあうらあうらあうらあうらあうら 伊賀 利 雪

東叡山ふあうらうら

少坊まよやあうらあうらあうらあうらあうら 其 角  
 つねいあうらあうらあうらあうらあうらあうら 尚 白  
 鶴のあうらあうらあうらあうらあうらあうら 九 兆  
 まらうらあうらあうらあうらあうらあうらあうら 丈 草

○猿ま

有母のまづく小原まはら史邦  
老ふまづれて千那

葛城のふり芭蕉  
燈籠芭蕉

いづれ國を垣のた芭蕉  
八雲後の料ふ芭蕉

一里いれ芭蕉

亡父の墓東谷中芭蕉  
ふれ廿年の後芭蕉  
おふ松樹を芭蕉  
まゝつて芭蕉  
墓を芭蕉

まろりや芭蕉 園凡  
あふふ芭蕉 去来  
けの芭蕉 凡兆  
ほ人のや芭蕉  
龍丸芭蕉 半残

照る伊賀 長眉

大岩や曾良

道灌山嵐蘭

源氏の羽紅

標干加 北枝

焼く加 凡兆

海草江戸 普船

大和大和 芭蕉

ふら探丸

やま智月

木曾塚山川

○懐しの

くそその石もわらうは水雲のる  
まの秋いとわら秋遠の堂花

望湖水惜春

ゆきとさよにのくくとくもさる

乙 弱  
曾 良

芭 蕉

善の羽を刷ぬまの  
一ふき風の木葉まの

去 來

照川の朝つらぬく川をえく

芭 蕉

たぬきとおくまを源池のら

史 邦

まのく戸ふ善の遠のく宵の月

芭 蕉

くふれくまを名 如の利来

來 邦

かこあたる善縁とくく社をて

來 邦

まここくまをさめくやまのまを

來 邦

何ゆもまをの因にあつらり

來 邦

里くえ初く午の貝ふく

來 邦

ほつまをまのゆまのまを

來 邦

芙蓉のたれのほくくも

來 邦

吸おはまをまをれくまをせんし

來 蕉

三里あまりののろかくまを

來 邦

このまを 盧同く男辰まを

來 邦

さくあつまを。母の 雛 ね

來 蕉

若れうくまをまをくまを

來 蕉

くくくまをくくまをの振ま

來 蕉

いふ時く二日のあつらへてま

來 邦

まけまをくくまの北 風

來 邦

火くくまをれくまをまのま

來 蕉

ほくまをれくまをまをくく

來 蕉

瘦者のまをくまをる力なき

來 邦

隣とくくく車引くま

來 蕉

くまをくまを被けくくまを

來 邦

今や別の刃さくまを

來 邦

せりくくまを端てくくまを掃ま

來 邦

何のん切くる花くくまを

來 邦

まをくまを月のおわらけ

來 邦

湖くまの秋のけくまの初花

來 蕉

○猿まの

柴の戸や葎もあめをまよわす  
めのことろがくし風の夕とま  
押合て暮すいふくちのあま  
たつらのちのちとあまを  
一梅 歎つらるる 室のそら  
枇杷のちをまよわす

去来 九 芭蕉 九 兆 九 史 邦 九

邦 兆 来 蕉 兆 邦

市中小おの白ひや交の舟  
らり〜〜と門くのあま  
二もまよるも果され 穂ふら  
所うら〜〜と一 枚  
此節ハ 根も足知くそりゆき  
た〜とひや〜と〜と 穂  
ま村り 穂もさるるまよるれ  
蒔の芽とらふり 穂ゆり  
道心のおとらひ 穂のつらむ時  
能さの七尾のち〜と〜と

九 兆  
芭 蕉  
去 来 兆

兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

魚の背をさるるとのちとをく  
侍人ハ〜と山門の 穂  
ま〜と〜と 穂と削もあま  
陽後ハ 河の心まよるまよる  
苗香のまよとゆき 穂をま  
傍やまよむ〜と 寺ふら〜と  
さ〜と川の穂と世を 穂の  
年ふ〜と斗の穂をまよる  
むさ 穂 穂 穂  
と〜と〜と 穂と 穂と  
道〜と〜と 穂と 穂と  
て〜と〜と 穂と 穂と  
戸 穂と 穂と 穂と  
と〜と〜と 穂と 穂と  
と〜と〜と 穂と 穂と  
そのまよるまよるまよる  
ゆ〜と〜と 穂のまよるまよる

蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆

○穂の

あつたふちく居ていぢぢつと  
命うまうまうま様集のさこ  
さまうまうまうまうまうま  
後世の果てこれふ町あり  
何故に開きふふれ後々  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと

九兆土芭蕉土去来土

灰汁桶のまぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと

九兆 芭蕉 野去 水来 兆蕉 兆蕉 兆蕉 兆蕉 兆蕉 兆蕉

夕めあつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと  
あつたふちく居ていぢぢつと

兆蕉 水来 兆蕉 兆蕉 兆蕉 兆蕉 兆蕉 兆蕉 兆蕉 兆蕉

○様この

うてつふ自憐いとせて持ちん  
又小ち幸一の親と九物とを  
説より田のまやとていひ給ふ  
か茂のやうにいよるはま  
ゆ葉の尻ろろとくもまを  
るのやとりの舌を迅速  
をぬかるまはりのまのま  
まらうくもふ蘭のまら  
もつらうく後つらふまら  
まらうくも 嘴のまら

九兆九芭蕉九野水九去來九

水 來 兆 蕉 水 來 蕉 兆 來 水

餞乙洲東武行

旅をままりこの宿のまらけ  
かこあこらうまら 乃 喉  
まらまら 小田ふちのまら  
まらまら 従つてまらまら  
斤陽りまらまら

芭蕉 乙 初 素男 珎 碩 素男 珎 碩

二階のまらい  
旅をまらまら  
旅のまら延の力まらまら  
わつらんまらまら  
肉をまらまら  
卯の別のまらまら  
まらまら 松のまらまら  
旅のれまらまら  
まらまら 百をまら  
旅まらまら  
けまらまら  
けの柄まらまら  
旅まらまら  
まらまら 旅  
旅まらまら  
汗のまらまら  
まらまら 雞の  
大旅まらまら

蕉男 碩 蕉 碩 智月 九兆 去來 正秀 半殘 土芳 殘

○旅の



牙ハぬれ紙の取所なき  
 小刀の影又なる細工をこ  
 棚より大ともを大羊の後 園  
 こころにいおのふ候より浦 猿  
 もゆき今合せるころかこまぬ 残  
 は多もこわれめとくる破扉 凡  
 難けねきせりてんごうごう  
 喰き事の満ちたるを係つてい  
 深く深くはるこころを教  
 形あるを修くと習ひたる今修  
 ふききとくる牛の刻り終  
 花あましくさくらのついでに  
 誰の伎と保るこころのせ 羽  
 芭蕉ニ 乙効 五 土芳ニ 珍碩ニ  
 園凡ニ 素男ニ 猿雄ニ 智月一  
 嵐蘭一 九兆ニ 史邦一 去来ニ  
 野水一 正秀一 羽紅一 半残 四  
 芳 残 凡 残 凡 雄 芳 凡 蘭 邦 水 紅

幻住庵記

芭蕉州

石山の奥岩間のころろふ山有園分山と云  
 えたりと園分寺の名と作らるる一庵小庵き  
 原と後とて嬰惚と名する事三曲二百ありて  
 八幡宮とてせとる人神神はは泥のそる像も  
 唯一の家小に甚忌ふる事と两部とて和ら  
 利益の壁と因らるる事と又貴し見は  
 人の指さるる事といひて物たるもの傍に  
 後於一草の戸よりを根籠れとてかむる根  
 りり根籠れ根籠れとてとて幻住庵と云  
 一の傍何れは勇士菅原氏曲水子の伯父うらん  
 竹とと今ハ八年計しりふ成て正し幻住  
 老人のあとのしせり予又市中とてる事  
 十年計しりて六十年やちる事ハ菅原のみのと  
 失ハ蝸牛の家と解て奥羽赤子の最き日  
 よ面とこころとて言す故とあやむる事北海の  
 岩磯ふきしをと破りて今嵐湖のの傍に標  
 竿の傍果の流とてまらへき若のつ年乃後

○猿の



人々ふんと動しあるハ世守の里のどろと  
た入るるそめあつこの痛くはあつたを  
畑ふらふらちを我ずらぬ農終日既ふ山の  
鳴くこの鳥を秋を静く月をけを  
新と伴ひ煙をるそい國兩ふそを  
うくしそそひそふふふふふふふふふふ  
疏とくくくくくくくくくくくくくくく  
世といふくくくくくくくくくくくくく  
一物とくくくくくくくくくくくくく  
五平の地とくくくくくくくくくくくく  
廓ふくくくくくくくくくくくくく  
とせめあつるくくくくくくくくくく  
とくくくくくくくくくくくくくく  
此のゆふつあつる楽天ハお徳の杯とやう  
老杜の底くくくくくくくくくくくく  
いつくくくくくくくくくくくくく  
きくくくくくくくくくくくくく

題芭蕉翁國分山  
幻住菴記之後

何世無隠士以心隱為賢也何處無山川  
風景因人美也間讀芭蕉翁幻住菴記乃  
識其賢且知山川得其人而益美矣可謂  
人与山川共相得焉迺作鄙章一篇歌之  
曰

琵琶湖南兮國分嶺  
古松鬱兮綠臨清  
茅屋竹綠總數間  
内有佳人獨養生  
滿口錦繡輝山川  
風景依稀入俳城  
此地自古富勝覽  
今日因君尚益榮

元禄庚午仲秋日 震軒具草

凡右日記

時も皆中んくくくくくくくく 曲水

○猿の

くらしの流るる色交の山  
野水  
去来  
元兆  
千那  
珠碩  
向径のやまをさや友のやま

贈紙帳

おりのや 残性よけと語り  
野徑  
里東  
乙易  
怒誰  
探志  
元志  
泥上  
史邦  
正秀  
柳陰  
如行  
訪るるやあ

推のあとうてやせしのみ  
脇野  
市隱  
美臣  
美臣

振所為や早苗のくけふ夕涼  
半残

一袋これやまの田のこゝま  
之道

書音

一夏ふるらささうりや  
魯町  
及肩

登猿腰掛

秋風や田との山のくらしより  
尚白

贈葉

ま〜あもま〜あ〜あ〜あ〜あ  
北枝  
木前

包紙書

遠くまでま〜あ〜あ〜あ〜あ  
勝野  
智月  
羽紅

○猿の

桐の梅やきりてつゆじりくそ 昌房  
里ハいづ夕めりくさのそくさく 何処  
啼やけりくさふらりくのそくさく 越人

越人とも同く訪ふく  
蓬の実のけふは入るる那 等我

明年生るる旧庵  
さふやゆりもあはれゆりも 岩蘭

同夏  
ま〜ま〜やけりくさく〜 曾良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽誓之首韻也非比  
彼山寺偷衣朝市頂冠笑只任心感  
物写興而已矣洛下逸人允兆去米  
随翁遊字謀館竹窓躡等凌節斯有  
歲屬撰此集玩弄無已自謂絶超狐  
腋白裘者也於是四方唵友憧々往  
来或千里寄書々中皆有佳句日蘊

月隆各程文章然有昆仲騷士不集  
録者索居窳栖為難通信且有苑倪  
婦人不琢磨者鹿言細語為喜同志  
雖無至其域何棄其人乎哉果分四  
序作六卷故不遑廣搜他家文林也維  
貳元祿四稔辛未仲夏余掛錫於洛陽  
旅亭偶會兆來吟席見需記此夏題書  
尾卒援毫不揣拙庶幾一蓑高張有補  
于詞海渙人云

風狂野衲

文艸漢書  
正竹書之

○猿蓑の

續猿蓑

八九百をてるゆる柳う那  
 まのうゝまの畠なるあな  
 神あつるまをりあつる海織を  
 肉いゝまゝつゝ呪のふまひ  
 きのうゝ目移るまの月の巻  
 約脊うれて肌をうゝまを  
 浴所もまゝい風ふれり  
 孫々ゆくまの祖父の信沙  
 根さゝあつてほりうまを  
 煤をまゝまゝはや雁の信  
 物束のあつてまゝけあつて  
 十里をうゝの余あつてまを  
 毎のまふあつてまゝおりまを  
 病まゝまゝのまゝ門の書つけ  
 いゝまゝまゝのまゝけあつて  
 中へまゝまゝのまゝけあつて

芭蕉  
 沾圃  
 馬里  
 里馬  
 蕉里  
 沾圃

蕉里 沾圃 蕉里 沾圃 蕉里 沾圃 蕉里 沾圃 蕉里 沾圃

○續猿

有海よあつてそのなをみて  
 るるふくまらん入敷のそえに  
 是のそまは川流れつほをま  
 浮勢のりぬふるつてふてま  
 ぞおふふまの仲間をみて  
 しみしをのこるまを  
 弾寺く一日あそふ砂の上  
 板の角のそりぬ 雪 完  
 陰ありの牛くし後とてつて  
 なれぬ好くつてつてつて  
 月やくし侍はまのそつてつて  
 藤の葉のそつてつてつて  
 むのそつてつてつてつて  
 借借をしつてつてつて  
 削やうにそつてつてつて  
 ふうふふつてつてつてつて  
 口をてつてつてつてつて  
 そつてつてつてつてつて

蕉 沾 里 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉

花のそつてつてつてつて  
 海つらのそつてつてつて

蕉 沾 里 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉

蕉のそつてつてつてつて

蕉 沾 里 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉

つるまの岸のあつてつて  
 さらふとつてつてつてつて  
 みるくつてつてつてつて  
 花をそつてつてつてつて  
 庭と交てつてつてつて

蕉 沾 里 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉

悔しつてつてつてつてつて  
 強状をんてつてつてつて  
 よつてつてつてつてつて  
 むつてつてつてつてつて  
 つるまのそつてつてつて

蕉 沾 里 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉

風をそつてつてつてつて  
 春の秋のそつてつてつて  
 春をそつてつてつてつて  
 春をそつてつてつてつて

蕉 沾 里 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉

春をそつてつてつてつて

蕉 沾 里 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉 沾 蕉

○續様

めもつる浮勢の亭所のくくが  
 羨ハあつゝはこつぬ一徳  
 徳勝と云あつてきこはせ  
 とも静ある平乃深纏  
 くとひそのぬまをと掃砂し  
 ともぬ合をくかふてある  
 ごとくふらうちの老い中ぬく  
 之候嘉賀の前のうきむじし  
 けのきよふこころ若きののむきく  
 あつゝむきをまの芥くくとも  
 口くふ寺の傍園を云せく  
 及のあまのあといしけくき  
 せうりくまこさつらぬ小高ひ  
 早下くくをふよの料理く入  
 乳をく秋あつゝく学の母  
 新くくわくく玉世のあ  
 此色ハ實の母のあつ同く  
 有けてりか母のく名内

里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾

志のききく唯子母のゆらひお  
 ずて意味よとて枚苗の風  
 亮のりけきとて新子の着く  
 何くの土のくくくうけろく入

里 沾 里 沾 里

いとくくくのあつゝく居る鼠くれ  
 きこのまここのあつなうく飛  
 大根のそくぬ土くうくくれて  
 上下とくり本調茶のむ秋  
 町初小舟えの改の集め勝  
 あつちくくくくくつる次  
 初き院の整りの得極くくく  
 ゆくくの候を楓やうやく  
 粗の縁くくあをうけあのく  
 目利くくあをよひさうくあ  
 状業と建のの飛御くひをて  
 きと七うくくあくく日のか

里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾

○續錄



草の葉ふらふらと風の流ちま  
伊駒まきつゝ入綿さりの雨  
くま旅ハ終つてれまわりの  
まわりのまわりのまわりの  
葉まのまのまのまのまの  
柳の傍へ門とまきこり  
百何とてあつて世々のまま  
こまをまと終ふあつてり  
清おの流成つておろり  
まのまのまのまのまのま  
あままのまのまのまのま  
火燈の火つてまのまのま  
一まのまのまのまのま  
折くまのまのまのまのま  
流ふか城のちうまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま

里 沾 覓 里 沾 覓 里 沾 覓 里 沾 覓 里 沾 覓

まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま

里 沾 覓 里 沾 覓

積善くもれまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま

沾 圃 芭 蕉 支 考 惟 然 蕉 考 然 考 然 考

○續 稜

朝日のひいとくちやうぢぢん  
一をぬんぬくまゝくくくぬぬ  
きさきんしふふまの流の流ぬ  
らぐり門あるあつらふまの月  
初あゝゝ 畑の人のうけまらり  
ふんぬくる 後の小いさー  
えそとるに三井はふのぬりり  
あぢあぢくくふいしくふさ日  
くち風の又あふふく北あぬ  
わらまゝ 肺をたぐるうらうら  
後年の明儀に今交配あつら  
あぢあぢくくくくくせられぬ  
大せりふりく二りあるまの産  
まらうまゝ 井の流 道  
あぢあぢのまゝ 井の流 道  
奥の世をくく 近年の化  
酒よりと者のやれまゝくく  
赤鷲のとをれまゝくく

蕉然考 蕉然考 蕉然考 蕉然考 蕉然考 蕉然考 蕉然考 蕉然考 蕉然考 蕉然考

定ぬぬぬのくくくくく  
藤汗のくくくくく  
まの産 とうくくくくく  
大工つうひの男ふさぬぬ  
ふんぬぬぬぬぬぬぬぬ  
くくくくく市の中とあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

蕉然考 蕉然考 蕉然考 蕉然考 蕉然考 蕉然考 蕉然考 蕉然考 蕉然考 蕉然考

今宵賦

野盤子 支考

今宵と六月十六日のまらあふあひ月ハ  
東方の礼山ようけく衣裳ふ湖ろの秋  
とぬくむまわハ今宵のあゝあゝあゝあゝ  
まの早の序とくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく

○續録

かのちちふ糸のくくこをわめぬ有岸のれ  
 くちちちひみの糸とをぬりしるもて  
 つつとゆるゆるら便ハ流川のそよをさる  
 のま秋とうさゆいこくこくつこは月の  
 あそひとこくこくつは空の山甲ふ工母の古  
 蹟とこくこくひ流の痕跡らふ流をくく  
 加茂祇園の流こふとこくこくこくこく  
 けしうけしとまこけしとこくこくこくこく  
 う湖のの納涼とこくこくこくこくこく  
 こくこく甲の暑と暑くこくこくこくこく  
 とこくこく今宵と暑は成とあこくこく  
 て傍あり傍あり傍ありて傍よ似る  
 めのあそこのまこくこくこくこくこく  
 岸ふ少ねとらこくこくこくこくこく  
 きたこくこくこくこくこくこくこく  
 たり一歳年ありしこくこくこくこくこく  
 てわをこくこくこくこくこくこくこく  
 こくこくお人の顔ふうひてあやえす結

鳴くくおののこくこくこくこくこく  
 けたけはまおとこくこくこくこくこく  
 一と支考とつせの方ふねとこくこく  
 時名のけいむくこくこくこくこく  
 うこくこく湖のあそこのやとこくこく  
 きたこくこくこくこくこくこくこく  
 きこくこくこくこく無常あはとこくこく  
 そこくこくこくこくこくこくこくこく  
 よあとのませんとたこくこくこくこく

夏のおやと暑くこくこく冷し相  
 家いこくこくこくこくこの流先  
 暑いいつこの程くまをへて  
 古きと昔年ありこくこくこくこく  
 月影のそをれちうよるそよの色  
 ちまうふて後とふるおこくこく  
 松と竹場のおくこくこくこく  
 芭蕉  
 曲翠  
 卧高  
 唯然  
 支考  
 芭蕉  
 翠

○續様

山うつくすふ名と書し出さし  
 阪植ふる向稱ふるむむ大赤法  
 とうとうと夫と志する思障  
 おのろるやふよまをし梅の味  
 持佛のうろふふ日さき  
 年賦ふまをと着るさしとて藤  
 秋風さする門の居風呂  
 る引て旅をいゆる月の光  
 尾注してついでるふよまを  
 眼好のさしとるふあふらら  
 四月ゆれく樹もさよこさ  
 を風うと暮後のつらうらら  
 霧うららつくめさるうらら道  
 寝るぬを舞いし男もさきさ  
 何その時と山伏うららなる  
 毎作とを捧ふ付ららるらら  
 蔵といたるお月野の末  
 相名と路をいゆらるらら

高然考蕉 高翠蕉 高翠蕉 高翠蕉 高翠蕉 高翠蕉 高翠蕉 高翠蕉 高翠蕉 高翠蕉

漆の日和く音の氣きひ  
 まるまるとせぬ海のしとま  
 芝居のふとふくあやうら  
 封付しふあまゆる日のさ  
 そららくあやうらとるのふら  
 生流つるは糸の角の海高所  
 なる所とあなるさき一因  
 今のさるふ法とさるらら梅のと  
 大きれ後のさしんふす甲の  
 豊なるさるらと庭のさき  
 梅うけつらさき梅欄の下

然翠高 然翠高 然翠高 然翠高 然翠高 然翠高 然翠高 然翠高 然翠高 然翠高

春之部 蕉

温名にあつておとやとる梅  
 春時ふふ又さし月うさ月梅  
 春ふ初ぬららるらとや梅  
 ちさるらとあゆむららるら山  
 角のれしとささるらとるら

露沾 其角 芭蕉 洞木 丈草

花あて竹えさる新めやけさか 洒堂

留まぬ酒あふあそひてまきる

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

惟然 支考 沾徳 榎雄 陽和 乙州 木節 沾荷 子珊 卓袋 李里 挑首 一桐 如雪

田家

藟弱の名おとまん山さくら

咲くも花や飯茶ふ十石

山門ふ花あつてふふのふ

あつれあつれあつてふふのふ

李里 挑首 一桐 如雪

花あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

唯然のまきふふおひわらうふ

酒あて竹えさる新めやけさか 洒堂

其角 卓袋 沾圃 企 嵐雪 曲翠 孤屋 尾頭 芭蕉 野水 其角 昌房 良品 曾良 万乎

續様

あつれあつれあつてふふのふ

あつれあつれあつてふふのふ

あつれあつれあつてふふのふ

あつれあつれあつてふふのふ

あつれあつれあつてふふのふ

魚日  
千川  
大舟

五井の社山詣り

遊糸  
千那  
意元  
李由  
九節  
巴丈

鳥附魚

其角  
史邦  
智月  
芭蕉  
去来  
洒堂  
傘下

長虹  
野童  
峯嵐  
槐市  
河瓢  
釣帚

芳野西河の賦

土芳  
圃水  
子珊  
山蜂

其角

春草

正秀  
此筋  
羽紅  
猿雖

宵のるるや土音のきく  
 車來 閨指  
 歩むや梅の花ふよりのき  
 荒雀 馬 莧  
 落しきくはるるの鬼あき  
 拙 侯  
 地よりくろくはるるのき  
 乃 龍  
 踏まきく土音の切目や燕の候  
 正 秀  
 ふく倒るる形ふよりのき  
 夕 可  
 まわらぬやまきく山ゆり  
 圃 落  
 味多きをのふらぬ肥るる  
 一 桐  
 月の影く梅の花は梅の候  
 圃 落  
 蒲公英やまよりのき  
 圃 落  
 猫意 附胡蝶  
 探 丸  
 ころねやふらぬ梅の意  
 美 已 百  
 うき意ふらぬ梅の意  
 美 已 百  
 ちのらぬその意く梅の意  
 美 已 百  
 白日志門也  
 柳 梅  
 とありては趣い知く胡蝶  
 惟 然  
 空文まのらぬ梅の意  
 閨 指  
 隙の音お聞る候よりのき

風吹く霜のきく少  
 雪 窓  
 春鹿  
 春耕  
 妙福のくろくあてあり梅  
 木 節  
 苗れやまはるる梅の意  
 此 筋  
 千川の田とくく梅の意  
 一 鷺  
 桃附株  
 白梅やまよりのき  
 桃 漆  
 今組いよと梅の意  
 介 戎  
 伏ふるとまはるる梅の意  
 雪 芝  
 梅とくく梅の意  
 水 鴨  
 其 角  
 江東の春由く梅の意  
 其 角  
 おのく経文のきく梅の意  
 其 角  
 光のく梅の意  
 其 角  
 小阪津ふきと梅の意  
 角 上

續猿

残の松くまゆふたは松くれ  
洞木  
野坡

秋冬 附 野野藤

山吹やほふ干とる善一と  
關指

田家の人小對して

山吹やほふ干とる善一と  
洒堂

娘あまのつししの後や涙のうら  
雪芝

義野や松まふとくく夏の花  
荊口

庚戌

山の隈とちうと魚あつとまの舟  
魯町

夫の附 夫を性

おもしろとそこのをさるるやまの石  
荊口

あまのつししの後や涙のうら  
乃龍

まふやを丸あつとる春とる  
遊力

ちうとくまの馬と武江の松屋と

とらふりつ

まふやを丸あつとる春とる  
支考

春もや光りうらふ能治う遊  
桃首  
風麥  
風睡

沙干

のちの帆の波をよめぬ干か  
去来

あ川小島をの氣れと沙干か  
關指

雑春

あつりやあをれ初るも加松  
許六

あまのつししの後や涙のうら  
風睡

あまのつししの後や涙のうら  
土芳

うけらや暑く松の御ちう  
配刀

小島をよめぬのちうとる松屋と  
万乎

あまのつししの後や涙のうら  
苔蘇

あまのつししの後や涙のうら  
均水

あまのつししの後や涙のうら  
正秀

三尺の鯉をよめぬのちうとる  
仙花

川をのちうとる也田屋と  
支浪

三月

續猿



源歌を白用楽の多勢う那 支考

盛旦

あまのやまふまふ〜 武仙  
遠道と〜のうけ〜の三所ぶ 百威  
〜いしやや粧舞ふ〜の早〜き 尚白  
ま〜の具〜の貝 圃落  
母方の後り〜やきを治 山蜂

讀ふ〜の名堂と顛倒と〜

と老父の文ふち紙〜はれい

初日やお原と夜のう〜表 千川  
人ものぬまや夜のう〜の梅 芭蕉  
四つ夜のわのう山崎〜の毛 其角  
標の世何海ま〜やま〜 嵐雪  
万果ぶ〜ちうふ〜のそほの陰 去来  
ま〜の梅え〜の羽ふ〜 土芳  
と山を〜よくは〜の空洞法 凡睡  
〜〜原とま〜けて  
えりやま〜の梅の花 株准

ふろふいよ川 葛雪  
春を〜負〜と〜の矢 野童  
崖のまふ〜と包尾の翻のそり 耕雪  
魁のま〜の〜と〜西日か 左柳  
〜の〜の〜の〜日比丘尾 前川  
枇杷のま〜の〜と〜 斜嶺  
世のま〜の〜と〜 山峰  
海のう〜の〜の〜 任行  
えりやま〜の〜の〜 竹戸  
我者〜の〜に〜の〜 是葉  
からぬや〜の〜の〜 沾圃  
〜の〜の〜の〜 圃角

夏之部

郭公

曉の雲〜の〜 其角  
〜の〜の〜の〜 丈草  
〜の〜の〜の〜 曾良

胃環のあけあけさうし 朝然し  
雪のあけあけせうあし  
燕のあけあけせうあし  
屋下りしあけあけせうあし  
はるはるあけあけせうあし

あけあけせうあし

郭公あけあけせうあし 沾圃

木附草花

後や日ふとくれくさるあけあけせうあし 聞指

里くのあけあけせうあし 野萩

園中ニ夕

ははのあけあけせうあし 此筋

あけあけせうあし 千川

あけあけせうあし 素龍

越山家の百合

あけあけせうあし 支考

あけあけせうあし 尾頭

あけあけせうあし 沾圃

あけあけせうあし 伊多 宇多都 拙候

あけあけせうあし 沾圃

あけあけせうあし 芭蕉

あけあけせうあし 嵐

あけあけせうあし 残香

あけあけせうあし 此筋

あけあけせうあし 白雪

あけあけせうあし 良品

瓜

あけあけせうあし 芭蕉

あけあけせうあし 至曉

あけあけせうあし

あけあけせうあし 凡弦

早苗

あけあけせうあし 長崎 卯七

あけあけせうあし 聞指

ふらふらの種ふくれしるるもあや  
田植奇ようなる熱の潮はゆ  
一田くめゆらうてやあのみる  
あのみる、意あたる子あうぬ  
支考  
北枝

あまの人の飛ぶさうさうさうぬ  
このもよそののさかいぬさうさう  
許六  
野萩

納涼

涼しきやもあやゆりあきさうさう  
そ葉たやもあやゆりあきさうの涼  
惟然  
半残

源川のあやあや

あやあやあやあやあやあやあやあや  
あやあやあやあやあやあやあやあや  
史邦  
重翠  
杜年  
万乎

漫興三首

あやあやあやあやあやあやあやあや  
あやあやあやあやあやあやあやあや  
洒堂  
支考

あやあやあやあやあやあやあやあや  
あやあやあやあやあやあやあやあや  
聖芝

あやあやあやあやあやあやあやあや

あやあやあやあやあやあやあやあや  
あやあやあやあやあやあやあやあや  
游力  
全  
去来

あやあやあやあやあやあやあやあや  
あやあやあやあやあやあやあやあや  
正秀  
土芳

あやあやあやあやあやあやあやあや  
あやあやあやあやあやあやあやあや  
我眉

あやあやあやあやあやあやあやあや  
あやあやあやあやあやあやあやあや  
里圃

盛夏

あやあやあやあやあやあやあやあや  
あやあやあやあやあやあやあやあや  
野萩  
万乎

あやあやあやあやあやあやあやあや

あやあやあやあやあやあやあやあや  
あやあやあやあやあやあやあやあや  
正秀  
乙州

あやあやあやあやあやあやあやあや  
あやあやあやあやあやあやあやあや  
怒凡

あやあやあやあやあやあやあやあや  
あやあやあやあやあやあやあやあや  
素覽  
我拳

何れもや... 積あふく... 粒もあつ... 三つれ...

印苔 卓袋 里東 沾圃

可誠 曲翠

不王 芭蕉 沾圃 拙候

出羽 正秀 胡故

暁鳥 圃水

菅蘇

白面や...

きつ...

正秀 胡故

表の... 蟬...

乙洲 暁鳥

菟...

兼蛤

菟...

杉瓜

菟...

荊口

菟...

如真

菟...

文鳥

菟...

葛啞

菟...

水鷗

菟...

馬莧

菟...

重翠

菟...

野童

○續核

晋の... 水鷗

空形くろくさすのたや 芭蕉  
粘るんれ惟子めくるさす 惟然

貧僧のくろくさすのたや

よすのたやふさ日の物夜ふす

みくせつらふさ

惟子の粘るんれやきく 支考

捲の部

名月

名月よふのたの芳也田のりり 支考

名月のたうとえそて 棉 畠

あつたはつたのらやうて名月の

夜この二白とやうていれはるる

川へうも月とす川へう根のきこ

とわわうらんあらんこお村のうれ

園位あふのあらんて 禁を

方横つらあつて平田

星くろくさすの老杜り唯雪水のり

とくろくさすのたや

次の棉とてけい言まふ兼く

らそれやうあうりいれんものむ

正のつたゆんはあらん月のりり

とたあつたうと花とちんて

とらんやとあひやうていれん

法有月とあつてそち持分の

るともれをまうていれん

結へはつたあらん月のりり

何そそとととととととととと

後の人たつたあらん

支考評

名月の海より冷る回裏る如 酒堂

四月や雨よりかきく如然の月 如行

かのくろくさすのたや 露沾

ふさのあつたうとえそて 智月

○續猿

去月や若さをのほと人のり 關指  
 明月や若科よりりのこころあり 涼葉  
 明月や若科よりりのほとこころあり 不玉  
 中切の梨や若科よりりのつくと月んが 配力  
 去月や若科よりりのつくと月んが 左柳  
 明月や若科よりりのつくと月んが 圃水  
 明月や若科よりりのつくと月んが 山蜂  
 明月や若科よりりのつくと月んが 風国  
 去月や若科よりりのつくと月んが 需笑  
 去月や若科よりりのつくと月んが 重友  
 明月や若科よりりのつくと月んが 泥芹

しのせのつと月んがつと月んがつと  
 あつと月んがつと月んがつと月んが

つと月んがつと月んがつと月んが 又考  
 若科よりりのつと月んがつと月んが 空牙  
 明月や若科よりりのつと月んが 如真  
 去月や若科よりりのつと月んが 宗比  
 去月や若科よりりのつと月んが 木枝

去月や若科よりりのつと月んが 刊合  
 明月や若科よりりのつと月んが 丹瓶  
 去月や若科よりりのつと月んが 野萩  
 去月や若科よりりのつと月んが 正秀  
 去月や若科よりりのつと月んが 水草

去月や若科よりりのつと月んが 景桃  
 去月や若科よりりのつと月んが 馬寛  
 去月や若科よりりのつと月んが 里東  
 去月や若科よりりのつと月んが 牧童

去月や若科よりりのつと月んが 芭蕉  
 去月や若科よりりのつと月んが 全  
 去月や若科よりりのつと月んが 猿  
 去月や若科よりりのつと月んが 七夕

○續様

文りやまの田のくしの天の川  
 涼葉  
 舟形へのまきりくや早の秋  
 東潮  
 だぬりことろのぬく秋まのまきり  
 沽圃  
 秋風やまの川の園もち  
 乙刈

立秋

粟ぬくや庭ふらりくく秋の秋  
 露川  
 秋の川や中ふらりくく秋の秋  
 尾次

秋草

秋の草の遠きも枯枝の  
 柳梅  
 細くもあつた枯枝のつらさ  
 随支  
 女市花ぬらぬる骨の染りゆ  
 濁子  
 とまねく秋の秋ふらりくく秋の秋  
 馬寛  
 一まきりくく秋の秋ふらりくく秋の秋  
 鳥栗  
 う園ころの秋ふらりくく秋の秋  
 文浪

贈芭蕉菴

百合のまきりくく秋の秋  
 風麥  
 まきりくく秋の秋ふらりくく秋の秋  
 史邦

秋の草の遠きも枯枝の  
 芭蕉  
 秋の草の遠きも枯枝の  
 至境  
 おくやるるあつた秋の秋  
 雪芝  
 若のまきりくく秋の秋  
 荷兮  
 山人のまきりくく秋の秋  
 桃妖  
 秋の草の遠きも枯枝の  
 杉下

朝のうた

秋の草の遠きも枯枝の  
 田上尾  
 あつた秋の遠きも枯枝の  
 闇指  
 あつた秋の遠きも枯枝の  
 風麥  
 秋の草の遠きも枯枝の  
 其角

虫附鳥

まきりくく秋の秋ふらりくく秋の秋  
 可南  
 竈るや秋ふらりくく秋の秋  
 北技  
 火の消て秋ふらりくく秋の秋  
 正秀  
 秋の草の遠きも枯枝の  
 水鷗  
 この草の遠きも枯枝の  
 杜若

續後

枯吟や何の味ある羊の毛 標丸  
 端傭の娘とほを流る石の毛 葛帯  
 草の窟ろふ静とさくくん 示峯  
 ぬけくく小あらひてみる秋の蟬 文草  
 尋うのよやくく浦の路をふ 馬覓  
 鶺鴒やまうまうる白川系 氷固  
 粟の穂とるあたる時や鳴鶴 文考  
 光の名の習とんちてて 芭蕉

秋風

秋風也二まきまこの流させ時 游力  
 雀子の聲とまむむ秋の風 式之  
 何ふくくかかかか秋の風 支考  
 松のまらや細さくもぬ秋の毛 凡国  
 おのろくくまの毛とまか 圃燕  
 ふんまらやゆらふゆら 九節  
 あれくくまらゆらゆら 猿錘

稲妻

稲妻くくるものまきく稲の夜 少年  
 一 東

稲妻やまふるくくく 宗比  
 明木の稲穂葉ふるまの溜 土芳  
 つまらや園のふかぢみ佐の毛 芭蕉

木實 附菌

園栗の落て死々るるをけ 為有  
 炭焼ふ炭焼くく心後う那 玄虎  
 秋空やりわくくく柿の色 酒堂  
 枯くくと葉とわくく 重翠  
 土の草や枯れん 沾圃

伊賀の山中ふ阿叟の室居と務めて

松茸やあけくくく山の形 惟然  
 土の草やあけくくく 芭蕉

机

漆色の膝うまれくく村おま 北鯤

鹿

尻まらふお所の鹿や風の音 凡睡  
 鹿くくくふ鹿やうくく 一酌

農業

○續猿



起しきし人ハ遊々々々 菖蒲の花 車甯  
あつちよ理出ひつゝ 極意小 買山  
さきまゝのるるるるるる 晴の極 如雪

りせの斗後小山をさきまゝのるる

菖蒲の花 乃龍  
子始前々々々々々 乃龍  
山麓のそとやふつふつ 斗從  
居りよさふは 支考  
つねのそとや 全  
机ささき路ふあつゝ 惟然  
百あつてつゝ 木節

大師の東山をさきまゝのるる

わのく様ふさふさ

そつとや西瓜と戸の花の枝 沾圃

兼

るるる二百十日も 葛栗  
あつちよつとや 濁子  
菖蒲の花のそとや 支考

形馬屋

ひささきやうるる 元峰  
情りけりるるる 文草

暮秋

産後や脊負く 野水  
り秋と鼓子の 乙州  
り秋や 芭蕉

雜秋

わさつとや 之道  
栗くくの小あつゝ 團友  
何れやのそとや 畦止  
少くも 四友  
あつちよ 荻子  
あつちよ 万平  
柿のそとや 宗波

平間と馬のそとや 教習のそとや

穀とつとや 能まるるるる

柿のそとや 宗波

續株

しんるのしんるれやていこのちん  
ふしんるんやの獨精と花しく  
しんるれんをこわんるんるんる  
このちんるれんるんるんるんるん  
指さやんるんるんるんるんるんるん

冬の部

時雨附霜

られんのねのほ月やまら何  
ちんるれを又ね風の只おうそ  
なうるんるんるんるんるんるん  
一何るやんるんるんるんるん  
ゆしんるれ少づの年のかあ城  
平押すうらな田らりの何るん  
はまらやんるんるんるんるんるん  
後生とちんるんるんるんるんるん  
空然のちんるんるんるんるんるん  
文うねやほららるんるんるんるん

野坡 北枝 芭蕉 露沾 馬苧 野明 簡指 空牙 為有 鶏口

んるんるて香好とぬるんるんるん  
柿色むりねらるんるんるんるん  
るんるんるんるんるんるんるんるん

られんのねのほ月やまら何  
ちんるれを又ね風の只おうそ  
なうるんるんるんるんるんるん  
一何るやんるんるんるんるん  
ゆしんるれ少づの年のかあ城  
平押すうらな田らりの何るん  
はまらやんるんるんるんるんるん  
後生とちんるんるんるんるんるん  
空然のちんるんるんるんるんるん  
文うねやほららるんるんるんるん

仲西のねらるんるんるんるんるん

えつねやたのむんるんるんるん  
んるんるんるんるんるんるん  
んるんるんるんるんるんるん

支考

しんるのちんるれとねせ母のちんるんるん  
ゆんるんるんるんるんるんるん  
やんるんるんるんるんるんるん  
ちんるんるんるんるんるんるん  
なうるんるんるんるんるんるん  
ゆんるんるんるんるんるんるん  
ゆんるんるんるんるんるんるん  
あまらるんるん

しんるのちんるれとねせ母のちんるんるん  
ゆんるんるんるんるんるんるん  
やんるんるんるんるんるんるん  
ちんるんるんるんるんるんるん  
なうるんるんるんるんるんるん  
ゆんるんるんるんるんるんるん  
ゆんるんるんるんるんるんるん  
あまらるんるん

袖の色や露あつらふも葉の赤 其角  
菊の香も味もあつらふも葉の中 桃隣  
八竹の香やあつらふも葉の赤 沾圃  
何れかのかさかすも葉の枝 曾良  
葉の白もあつらふも葉の赤 馬寛

柴桑の隠士も葉の赤を著すと  
何れかすも葉の赤のたつたも  
むらりり造化りつらふも  
今もその葉をまみひておのつら  
わらとあつらふも葉の赤  
琴もりりけりつらふも葉の赤  
らん竹洞老人も葉の赤を送らぬ  
そとつらふも葉の赤と著らぬ  
あつらふも葉の赤と著らぬ  
あつらふも葉の赤と著らぬ

素堂

草附木

ふゆや 浮羅われ 一りの遠る 曲翠

水不流く 岫やまらうらの水空 永固  
水心の花のこもれや 葉の赤き 惟然

范蠡う 趙南のこもれ

山家集の題ふ

一葉のこもれや 葉の赤き 芭蕉  
山家集の題ふ 用く 車庸  
あつらふも葉の赤き 土芳  
山家集の題ふ 葉の赤き 露笠

本まふ 附冬 拈風

おりのまふ 一葉のこもれや 葉の赤き 沾徳  
早もこもれ 水の拈ひつらふも 露沾  
み川やあつらふも葉の赤き 惟然  
拈風

本柳 坊宗 此の題ふ

まふ 一葉のこもれや 葉の赤き 一道

牛のり 一葉のこもれや 葉の赤き 杉風

まふ 一葉のこもれや 葉の赤き 桃醉

乃 龍

草枯ふもつてくも暗もあり  
 利牛  
 甲の枯くのも尻のふり  
 支考  
 あつちやもふもふも尻のふり  
 智月  
 風や背巾吹く牛のあつ  
 風介  
 本枯や川田の畔の浮き  
 惟然  
 うらや葉ふもつて尻の角  
 壁生

夷講

えいふ縁那うりふ津馬せうり  
 芭蕉  
 えは原海船もつて尻のふり  
 利合

鳥付り

のののののののの

雁渡りくもふりぬり  
 句空  
 追つて雪あつちやふもふり  
 葛葉  
 少あつちやうも甲ふもふり  
 文章  
 入海や船のふり  
 周指  
 撃カゴメつてつてつてつてつて  
 芭蕉  
 川鴨さつ追つてつてつて  
 古木  
 吸はつてつてつてつてつて  
 利雪

うらつと海もふりぬり  
 車庸  
 見え遠やふりぬり  
 水  
 つ追つてつてつてつて  
 杉風  
 川鴨さつ追つてつてつて  
 拙候

杜文ふりぬり  
 浮城の川あつちやうも  
 そ月附合

冷りのや門あつちやうも  
 里圃  
 あつちやうもつてつてつて  
 文章  
 何れもつてつてつてつて  
 小春  
 心や門をぬりぬり  
 支考

埋火

埋火やあつちやうもつて  
 芭蕉  
 焼くもつてつてつてつて  
 桃先  
 前やあつちやうもつて  
 洞木

雪

初雪や門あつちやうも  
 其角  
 初雪やあつちやうもつて  
 全

蒼鷺家ハとてうくまき  
 志こぼれあふれあふれ  
 へそやとてうくまき  
 心よのまきとてうくまき  
 繁利とてうくまき  
 浮気とてうくまき

史邦  
 陽和  
 圃吟  
 支考  
 葛平  
 祐甫  
 夕菊

非樂

今夕色うくまき  
 娘の門由とてうくまき  
 娘とてうくまき  
 煤掃附候とてうくまき  
 煤をとてうくまき  
 煤はとてうくまき

史邦  
 陽和  
 圃吟  
 支考  
 葛平  
 祐甫  
 夕菊

女兒の味のかや  
 娘もとてうくまき  
 娘もとてうくまき  
 娘もとてうくまき  
 娘もとてうくまき  
 娘もとてうくまき  
 娘もとてうくまき  
 娘もとてうくまき  
 娘もとてうくまき  
 娘もとてうくまき  
 娘もとてうくまき  
 娘もとてうくまき

馬  
 馬  
 馬  
 馬  
 馬  
 馬  
 馬  
 馬  
 馬  
 馬  
 馬  
 馬

歲暮附節李候衣配

門かやとてうくまき  
 大車やとてうくまき  
 幸の市とてうくまき  
 川結入とてうくまき  
 梅の梅とてうくまき  
 天鶴とてうくまき

曾良  
 里東  
 草士  
 車来  
 万乎  
 李由  
 其角  
 正秀  
 菽子  
 稜雖  
 惟然

續様

漢秋よまきと結をてとりの書

はるハ圖司呂九羽をうりうまに  
のちうして浮勢おもちうてけりうの  
そはくくの筆かうくくいひ所て  
今いあきんくううく

管人ふあやくおもあり年の書  
全はふあてとんすのあまの年忘  
所ふあはあめ年の申  
常あまの弱うてゆるあの中  
常あまの拍子とあうけあま  
裁層ふあふりり川名配  
一あまうあてあうくくあまの鶴

雑冬

少屋風ふあまを挽うくくあま  
植布ふあ風をくくあまの鶴  
井のあまのうくくあまのあま  
まあまや山伏村のあまつくあ  
あまをくくあまのあまや去純

芭蕉 支考 土芳 尚白 桃後 山蜂 利合 斜嶺 土芳 李下 仙杖 圃仙

巨峰よりあまのあまのあま  
山陰や横のあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあまのあま

雪芝 工谷 沾圃 杉風

釈教之部 附追善哀傷

涅槃

涅槃像あまのあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあまのあま

沾圃 芭蕉 不撤 山蜂

灌佛

灌佛やつくくあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあまのあま  
灌佛や釈迦とあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあまのあま

曲翠 不玉 之道

竜祭

あまのあまのあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあまのあま

嵐雪 去来

甲戌の夏大津ふたつとこのころに 沾圃

かきつり消息せしむるに四里ふ

帰すといふをといふむとて

あつたれ杖うさくら松の暮糸 芭蕉

悼少年二句

うれしきや麻木の葉もやどるまじ 惟然

その秋をとりぬるまじ秋の風 支考

徳倉の龍口寺あけく

首のたけの松葉の長もさし時々の 木節

とくもや移葉あやむる楠のあ 支梁

西新條

袖も柿とさくまらあやむ西新條 沾圃

臘八

晴とさくりてそねハ細きけ 許六

何のあれくは何きくふハ大津條 如行

雑題

治東のま如きみしてそまきも菜

罹咎の時

涼しくも空のふらふらる念佛が 去来

あつと飛ぶとこ二まきくいんうらめむ 智月

く細やあまらまらく佛を世 乙州

ゆらふ川紙回つやあまを諸 重翠

もまらふ初めゆるゆる念佛 野坡

念佛ふすやゆるあつ夕時ぬ 支考

旅之部

送別

乙未七年のまををばあつたつとて

まあつて解をのえ世のふらふ 荷兮

あつや柿くいあつて板の上 惟然

許六あまらゆるあつて時

猿人のふふも似よ推の花 芭蕉

留別

治の惟然つ宅よりあつたつ時

嵐とれあまの草とくくく 支草

○續猿

新のふのち〜〜送るふか 芭蕉

甲斐のふのち〜〜送るふか

はらけの山をよか〜〜

ふよ〜〜牛ふの〜〜昔の海 木節

縮糸や浮世と〜〜の 鎌山 越人

ふ〜〜つ〜〜の 海や陸の音 野徑

出羽の海ふ〜〜

のち〜〜

〜〜い〜〜地ふ〜〜 水取石 公羽

十〜〜ふ〜〜あ〜〜ぬ秋の風 許六

大志の海向ふ〜〜送るふか 全

〜海の海

〜〜〜〜〜ふ〜〜い〜〜えぬまの陸 曾良

〜〜〜〜い〜〜お〜〜あ〜〜さ〜〜あ〜〜る〜〜海 猿 雖

〜〜の〜〜た〜〜ち〜〜を〜〜れ〜〜 陸 海 我 峯

あ〜〜つ〜〜て〜〜海はあ〜〜つ〜〜 京のる 史 邦

田園の〜〜〜〜海〜〜い〜〜せ〜〜ら〜〜あ〜〜い〜〜 呂 九

又志の〜〜海〜〜け〜〜い〜〜海〜〜〜〜 呂 九

我藩園〜〜〜〜海の〜〜〜 沾 圃

常陸の園〜〜〜〜あ〜〜い〜〜ひ〜〜ら〜〜つ〜〜所 下

り〜〜さ〜〜て〜〜や〜〜り〜〜求〜〜り〜〜と〜〜き〜〜あ〜〜き〜

お〜〜い〜〜さ〜〜ら〜〜る〜〜あ〜〜つ〜〜て〜〜あ〜〜ら〜〜さ〜〜ら〜〜ら〜

た〜〜れ〜〜い〜〜つ〜〜秋別財の秋のり〜〜ら〜〜い〜

ま〜〜ら〜〜ら〜〜

縁〜〜も〜〜縁〜〜も〜〜梅ふ小豆 粥 支 考

その海や〜〜ふ〜〜ま〜〜つ〜〜ら〜〜ふ 柁 全

え〜〜縁〜〜之〜〜年〜〜の〜〜や〜〜原〜〜は〜〜の〜〜ま〜〜ま〜

ら〜〜う〜〜武〜〜に〜〜よ〜〜あ〜〜む〜〜む〜〜い〜〜ま〜〜て〜〜海 圃

驛 塚 幸 三 家 友 一 一 一

あ〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜と〜〜た〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜 芭 蕉





